



Teacher Soma の

英語のハナシ

第3回

奴隷貿易contdとオノマトペ

奴隷貿易とは

みなさん、今回は第3回です。第2回の終わりに、次回はオノマトペのハナシをすると約束しました。ですから、そうするのですが、その前に1回と2回で言い足りなかったことの補足を行いたいと思います。

第1回だと思いますが、15世紀からのヨーロッパの覇権のバトンのハナシをしました。そのバトン渡しは、大航海時代に始まり、ポルトガル、スペイン、オランダ、イギリスへと渡ったというハナシでした。そこで詳しく述べなかつたことがあります。それは、この時代を「大航海」とか「大交易」とか「大交流」とかいう名前では言い表すことには問題があるということです。すでに気が付いている人もいますが、これらの三文字ではその時代に起こった歴史的事実が正確に伝わりません。ヨーロッパ諸国がその時代に本当に何をしたのか、その問題をヨーロッパ目線ではなく、公平な世界的目線で見なければなりません。第1回のハナシでは、その点が少し足りませんでした。ですので、ここで少し補足をさせていただきます。

日本の高校の世界史の教科書、例えば、2024年発行のある出版社の「詳説世界史」では、この時代をやはり「大交易・大交流の時代」としてくくっています。そして、この時代に起こった出来事をヨーロッパの「(世界)進出」、「(新大陸の)発見」、「(アジアの交易への)参入」などとして大きくまとめています。内容の説明のところでは、征服者による「財宝の略奪」、「先住民の殺戮や奴隷化」などの文字は見かけますが、全体の書き方としては、この時代をあくまで大西洋を介した西ヨーロッパの国々の発展の一段階としてだけ捉えているような印象を受けます。したがって、筆者はそこに一種のもどかしさや突っ込みの足りなさを感じます。学校の教科書ですから、中立的な視点を維持しなければなりません。しかし、これでは「中立」にもなりません。文科省の教科書の検定を意識しているのか、どうも無難に扱って、さらりと流しているような感じがします。

筆者は、この出来事は、ヨーロッパ人によるアフリカ系あるいはモンゴロイド系の現地民族に対する殺戮、略奪、支配、強制労働、奴隷化、文化や社会構造の破壊などの非人道以外の何ものでもないと理解しています。「大航海」や「大交易」という名前自体、ヨーロッパ目線の言い方です。このまま英語に直すと、例えば、'The age of great navigation'、あるいは'The age of great voyages'になります。これではしかし、実態からほど遠いことになります。「命をかけて未知の海を渡った」とか、「それまで誰も知らなかった未知の大陸を発見した」とか、「危険を

冒し、未開の民族にキリストの教えを広めることができた」などという意味で 'great' と言うのなら、あまりにも自分たちのことばかりで、その航海あるいは航海の後にヨーロッパ人が他民族に行った蛮行を無視しています。歴史の知識と言うものは、偏った見方ではいけません。私たちは、歴史の事実をしっかりと認識し、二度と同じ轍（てつ）を生まないように学習しなければなりません。なぜかと言えば、人間は悪事を多々行い、しかも何度も同じ悪事を繰り返す存在だからです（歴史が示している）。今日でも世界で戦争が絶えないことや、恫喝（どうかつ）で外交を行うこと、庶民レベルでは日常の犯罪が絶えないことなどがその証拠です。そのことが忘れられてしまいます。

まず、ヨーロッパによるアフリカや南北アメリカの奴隷貿易と植民地化は、一方的な出来事でした。大西洋を挟んで、4つの大陸があります。大航海は、全体として大西洋の一角であるヨーロッパ大陸からの人間が、一方的にその他の3つの大陸に、探検や植民という自己都合の身勝手な名目で行った侵略と征服です。決して双方向の対等な活動ではありません。アフリカや南北アメリカの先住民にとっては彼らヨーロッパ人は突然天から降ってわいた悪魔そのものだったはずです。

「先住民は何世紀にもわたって天然資源などの富を奪われ、人々は貧困に苦しみ、世界経済の底辺に組み込まれた」というのは、ドイツの経済学者のAndre Gunter Frank(1929~2005)氏です。南北アメリカ大陸にもアフリカ大陸にもこのことが言えます。この先生は「1400~1800年頃までの世界経済の中心はアジア、中でも中国であり、西洋は東洋にぶら下がる周辺部にすぎない。西洋はラテンアメリカを植民地にして、銀を収奪し、これを決算手段にして中国から技術を買った。その後、世界経済の振り子は西洋の方に揺れたが、わずか200年でしかない。今や世界経済の重心は東洋にもどりつつある」とまで言っています。つまりFrank氏は、この「大航海時代」という歴史上の出来事は、どこからどう見ても、ヨーロッパの国々による南北アメリカやアフリカの原住民に対する一方的な支配、略奪、搾取であったと言っていることになります。

第1回で引用したイタリアの経済学者Arrighi氏もFrank氏よりは腰を引いていますが、「東洋の方が西洋よりも正統な質的に自然な発展経路をたどった。西洋は軍事力と対外貿易に依存する不自然な経路をたどった」と言っています。「不自然」とは少しぶん舌足らずなのですが、精一杯の表現のつもりなのでしょう。Yale大学の経済史家Kenneth Pomeranz(1958~)氏も基本的に同じ立場です。それぞれ学者ですので、インテリっぽく表現していますが、要するに、昔のテレビの時代劇で聞いたセリフを借りれば、ヨーロッパ人が行ったことは、「醜い浮世の鬼が行った不埒（ふらち）な悪行三昧」なのです。

ポルトガルからスペインへ

さて、ことのはじまりは一般に15世紀とされています。先陣を切ったのはポルトガルでした（今では、特に目立つことはない西ヨーロッパの一国です）。ポルトガルは13世紀にはいち早くイスラームの支配から抜け出し、オスマーン帝国(The Ottoman Empire)の支配地域や、アラブ商人やイタリア商人の手を経ずして、直接

インドと交易する航路を探していました。Daniel R. Hendrick著、原田正勝その他訳の「帝国の手先」（日本経済評論社,1989年）には、ポルトガルはコロンブスの西インド諸島発見の60年くらい前からアフリカ西岸を探検していたと書いてあります。とすれば、1430年代ということになり、ポルトガルがエンリケ航海王子の時代です。また、成城大学の武井暁子先生がネットに「奴隷貿易」というタイトルで論文をあげていますが、その中で、「1441年に最初のアフリカ人奴隷が黄金とともにポルトガルの首都リスボンに連れていかれた」と書いています。エンリケは時の国王ジョアン一世とともにイスラムをジブラルタル海峡から押し返し、アフリカ進出の機会を狙ってアフリカの西海岸への航路を探し求めました。そして、1419年には、マデイラ諸島を発見します。その後、その勢いを駆って、1488年にバルトロメウ・ディアス(Bartolomeu Dias)が喜望峰に達し、1498年にはヴァスコ・ダ・ガマ(Vasco da Gama)が喜望峰周りでインドに達するルートを発見しました。そして、ポルトガルは、1510年にはインド西海岸、1511年にはマラッカ、1518年にはスリランカを占領し、1543年には種子島に漂流、1550年には平戸で貿易、という破竹の勢いでアジアに進出しました。

これに遅れてはならぬと、ジェノヴァの船乗りとされているコロンブスが、イスラームの勢力から回復したばかりのカスティリヤの女王イザベル一世とアラゴンのフェルディナンド二世から支援を受け、カリブ海の西インド諸島を発見します（航海は四回にわたる）。すると時のローマ教皇アレクサンデル6世(Pope Alexander VI 1431~1503)が書簡を発し、カトリック諸国の間で、大西洋上のアゾレス諸島(The Azores)の西を通る子午線で、世界を東西に分割すると宣言しました。これで（時の最高権威から許可が出、鬼に金棒で）、スペインは西、ポルトガルは東と世界を二分し、植民地争奪戦に走ったわけです。スペインはメキシコのアカプルコから太平洋を渡り、東南アジアへのルートも模索しました。1565年にはフィリピン中部のセブ島に到着、1575年にはルソン島に行き、中国と貿易を行いました。中国の絹織物や陶磁器とメキシコの銀を交換したのです。「フィリピン」という名前は、時のスペインの国王だったフェリペ二世に因んだ名前です。

なぜ？

このようにポルトガルやスペインが海外に向かわねばならなかった状況はどうだったのか。専門家は、ヨーロッパの寒冷化、人口増加、資本主義の抬頭などをあげ、それまでの中世的な社会から近世的社会へ脱皮する変化の時代だったから、とっています。例えば、アメリカの社会学者Immanuel Wallerstein(1930~2019)は、ヨーロッパは14世紀後半から寒冷期に入り、各地で大規模な凶作が起り、農民の反乱が多発し、社会は不安定な状況にあったと言いつつ、こうした閉塞した社会状況の突破口を求めることにより、革新と拡張への劇的な転換が生じたと言っています（玉木俊明の「ヨーロッパ覇権史」筑摩書房,2015年 から）。

確かに、15世紀半ばから17世紀半ばまでは、ヨーロッパは最初の人口爆発を経験しています。それまである程度自給自足ができた国々が食糧難になったはずですが。また、経済的には、15世紀に北イタリアの都市を中心に、沸々と資本主義のネットワークができ始めてもいました。Wallerstein氏は、「ある国の経済成長は、別の国を経済的に収奪するから可能になる。工業国が成長するには、そこに原材料を供給している国が経済的に従属し、収奪される。したがって、原材料供給国は永遠に工業国になることはできず、貧しい国のまま取り残される」と先進国繁栄の方程式を説明しています。要するに、ヨーロッパは南米、アフリカ、それからアジ

アも含め、それらの国々を犠牲にしながら発展した、というわけです。

さらに哲学的に突っ込んで、この現象をとらえようとした人もいます。哲学者ですから、ことを難しく取り上げます。この学者は、アレクサンデルの書簡を「近代の鏡の起源」だといいます。「西洋が西洋について見ないでいること」（以文社、2004年）という本を書いたフランスの法制史家のPierre Legendre(1930~2023)氏です。変わったタイトルですが、氏が日本で3回行った講演をまとめた本です。内容は難しく、筆者は今一つ理解に自信がありませんが、著者のルジャンドルさんが言わんとするところは、以下のことだと解釈しています（諸学兄指正）。

まず「鏡」を持ち出したわけですが。これは比喻です。私たちは、自分の目で自分の本当の顔を見ることができません。鏡に映るのは、顔そのものではなく自分のイメージで、それを自分だと思い込んで生活しています。イメージ自体は本当の自分自身ではなく、いわば他者です。他の人々が自分をどのように思っているか、これもイメージです。ですから、つまりは、私たちは自分というイメージの他者を演じているだけで、本当の自分はいったいどんな存在なのかはよく分かっていない、ということになります。ルジャンドルはさらに続けます。例えば、フランスの詩人アルチュール・ランボー(Arthur Rimbaud)は、「私は1個の他者である」と言い、有名なオーストリアの精神学者フロイト(Sigmund Freud)も、「文化の展開は個人の展開と相似し、それと同じ方法によって働く」（ぎこちない日本語です）と言っているといいます。つまり、私たちは、それぞれの文化が与えるイメージの中で生きて、それに合うように演じている、ということを行います。

何を言っているの？という感じですか。要するに、西洋人は西洋人のイメージの中で西洋人を演じて生きているだけで、本当の自分や西洋という文化については無知だと言いたいのだと思います。そしてルジャンドル氏は、この無知が、西洋人が他者に対したときに生じる無理解の原因だと言っています（「無理解」程度では済まされないはずですが）。そして、結論として、このイメージの根源は、ユダヤ教に接ぎ木されたキリスト教なのだと思います。これです、キーポイントは。本来中東という乾燥地帯で生まれた宗教をヨーロッパに持ち込み、これをヨーロッパの秩序、いや世界の系譜的な秩序にするというイメージの中にヨーロッパ人は自分たちを見出し演じているのだ、と言います。別角度から言えば、この世のすべては、聖書の神様が書き記したテキストで、それを読み解くのが人間のすることであり、ヨーロッパ人のすることであるという代々の語りやヨーロッパ文化にイメージとしてあり、人々はそれを実行しているのだと言います。「大航海」などもそれに入るということになるのだ、と言っているのだと思います。

フランスの哲学者の言うことは（ドイツもそうですが）難解です。もっと簡単に言ってくれば助かるのですが、我々凡人にとっては「なんとも分かりにくい」の一言です。要するに、一つの自己解剖なのですが、問題は「だから西洋は反省しなければならない」とは絶対に言わないことです。ここに彼らの根本的な姿があります。いろいろ問題はあるかもしれないが、自分たちは基本的に間違っていない、というあくまで自己本位、西欧中心の考え方です。私には、それが「無限の進歩に向かう論理的人

間のどこが悪い」と言い張っているように聞こえます。例えば、19世紀のフランスの文人であるArtur de Gobineau（アルトゥール・ド・ゴビノー）は、1859年に「アジアは発明をした。その代わり、我々が持ち、実践しているような批判の能力はアジアには欠けた。批判は我々の最も大きな素質だ。批判は我々の精神を形作り、我々のすべての自尊心の源泉である」（レヴィ＝ストロース「月の裏側」から孫引き）と言っています。

これは何を言いたかったのでしょうか。「アジアの人間は批判力がない。言語が批判用にできていない」とでも言いたかったのでしょうか。批判精神を振り回すような社会は、ギツギツしてことが丸く収まらないということ、例えば日本人はよく知っています。ものを考えるには批判精神が必要だといいたいのでは、これにも程があるということを知りません。批判精神がアジアにはない、というのではなく、アジアでは必要な時にしかそれを使わないということなのです。そこが分かっています。とにかく、西洋は意固地というか分からず屋というか、まことに煮ても焼いても食えないといったところだったのです。ですから、作家の谷崎潤一郎(1886~1965)は、すっかりあきらめて、西洋は「陰翳」とか「空虚」とか「虚無」とかといったものをそもそも理解しようとしなうと言いました。そもそも批判精神の中和剤を持たないのです。漱石は、ヨーロッパはいつも娑婆（しゃば）ことだけだ、と言いました。その通りでしょう。なにせ、進歩と発展の道を通り抜けることしか頭にないのです。今でもそうです。そして、今の日本も真似をしてその道を通り抜けるようになりました。ただし、日本はこれまである程度の中和剤を持っていました。古いものと新しいものとを共存させるやり方がある程度残しています。問題は、今後どうなるかです。

ハナシをもどします。ローマ教皇の書簡のことです。ルジャンドルは、これが欧米主導の近代世界システムのはじまりだと言っています（皆さん、現段階で、いかに欧米主導に問題があるか分かりますね）。これにより、通商を行う法的な権利、イエスキリストによる救済を普及させる法的な権利が与えられのだと言います。彼の言葉をそのまま引用すれば、「つまり、世界の人間と社会の運命についての西洋的なヴィジョンを普及させる権利が確立したのだ」と言っています。しかしです、なんでも最後は神様に持っていくわけですから、無責任と言えれば無責任です。いくら革新と拡張の時代が到来したといっても、おこなったことは正当化できません。自分のところが苦しくなったからといって、人様の土地に入って、物を盗んだり人をさらっていったりするのは、拡張とか発展でとらえられない現象です。侵略です。時代によりそれが許されるとするようご都合主義の判断をやってはいけません。「ダメなことはダメ」、イメージであれ何であれ、自分の行為に対する無知は許されません。

さて、以上で、スペインの植民地がアフリカに一つもなかった理由は分かりますね。そうです、先ほど述べた教皇の子午線です。その線の西は、南・北アメリカ大陸です。ですから、南・北アメリカ大陸はスペインの植民地になりました。北米は大半がスペイン領（'Nueva España'「新スペイン」）と呼ばれました。南米も、ブラジルを除き全部スペイン領になりました。ブラジルは、東部がその子午線から東に入っていました。そして、16世紀前半に、ポルトガル船がアフリカに行く途中（おそらくインドを目指して）で流されブラジル東部に漂着し、そこを入植地にしたことが植民地化の始まりと言われています。ついでですが、ブラジルは、最も遅くまで奴隷制度を維持した国の一つです。16世紀後半から19世紀終わりころまで、砂糖、金の採掘、コーヒーの生産に黒人奴隷は必須の条件でした（1830年頃から、コーヒーの時代になる）。ポルトガル、スペインに続きオランダ、イギリス、さらにフランスやデンマーク、アメリカ合衆国も奴隷貿易に走ります。これらの国々の重要事業として行われました。この時代、他国のために使役されるだけで人生を終えた不幸な人々、ブラジルだけでも何百万人もいたはずで

そして、他国と言っても、畢竟、ポルトガルやスペイン王室などの、一握りの権力を握った人々でした。王室は、奴隷貿易を統括する組織を作り、奴隷商人に貿易許可状を発行し、それを売ったり、奴隷売却に関税をかけたりにして収入を得たのです。正に、自分の手は汚さないブラック王室でした。

犠牲になったのは、アフリカの黒人、北アメリカの原住民、南アメリカの原住民です。特に南アメリカ大陸では、原住民のインディオの人々は、強制労働にこき使われ、伝染病をうつされ、踏んだり蹴ったりで、人口が5500万人から1000万人まで減少したと言われています。この先住民の減少の穴埋めが、黒人奴隷によってなされたのです。

アフリカへ



6000キロにも及ぶアフリカ大陸西部の海岸線が、ヨーロッパ諸国の奴隷貿易の拠点になっていきます。はじめは、主に金や銀などの鉱物資源を求めての探検であったのですが、やがてサトウキビやたばこの栽培をするプランテーションという大農園の労働力としてアフリカの黒人を使役する奴隷貿易につながっていきます。16世紀後半から19世紀前半まで、およそ1000万人にも及ぶ黒人奴隷がアフリカから連行され、カリブ海の島々や北米・南米大陸で強制労働に従事させられました。アフリカの黒人にとっては、まことに悲惨な歴史です。この1000万という数字は、この問題を調べている研究者が出した数字です（1990年頃から研究が盛んになる）。現在、およそ400年の間に奴隷貿易に従事した35,000件にも渡る奴隷船に関する研究がデータ化され、ネットで共有されています（例えば、'Transatlantic Slave Trade Data'で、1と2がある）。興味のある人は、同志社大学の布留川正博先生が、岩波新書で「奴隷船の世界史」という本を書いていますので、参考にしてください。データには上がっていないアフリカ人の犠牲者も多くいたはずで、実際の数には1000万をはるかに凌ぐ数になるのでしょうか。人類史上最悪の非人道的出来事といって差し支えないはずで。

ポルトガルやスペインにおよそ100年遅れて、イギリスがインドを目指しました。筆者に言わせてもらえば、何度も言いますが、イギリスやオランダも体のいい泥棒でした。ドイツのCarl Schmitt(1888~1985)という法哲学者・歴史家は、世界史を「海の国」と「陸の国」のせめぎあいと見て、海を組織的に活用し、奴隷貿易を中心に植民地貿易体制を確立したオランダとイギリスを「海の国」と呼びました。スペインは無敵艦隊を持っていたのですが、「陸の国」にされています。「資本主義の終焉と歴史の危機」（集英社新書,2014年）の著者の水野和夫氏によれば、無敵艦隊の主要業務は中世的で、地中海での陸軍兵士の輸送であったとのこと。イギリスのように大西洋をビジネスの観点で利用しなかったわけ。平たく言えば、イギリスと比べればポルトガルとスペインは、王室のどんぶり勘定で、緻密な計算がなかった、ということなのでしょう。海と陸のどっちであれ、同じ穴の貉（むじな）です。これに比べれば、アジアの海は遥かに平和であったはず。あれほど悲惨な奴隷貿易もなく、貿易覇権をめぐって海の戦争もありませんでした。例えば、日本と中国の海（東シナ海）は仏教の学びの海であったと言えるほどです。

これほどの違いは、やはり民族の「でき」の違いというしかないのではないでしょう。当時大国であった中国は、弱肉強食のヨーロッパと異なり、朝貢貿易に徹していました。なにせ孔子の国でしたから、ユダヤ・キリスト教などの気性の激しい一神教の国々とは違います。ここに大きな違いがあります。「野蛮人」とは本当は誰のことであったか。

ヨーロッパ文明の本質はブラックな技術文明です。「ユダヤ・キリスト教テキスト紐解き文化」の国々では、おしなべて、技術は力、自然の力を利用する力、自然から人間を守る力、人類を改善する力、そしてそれだけではありません、他国を脅したり侵略したり支配したりする力である、という考え方に染まっています。

そもそも航海術などの知識は、12世紀にイスラーム世界から得たものなのです。ヨーロッパの知識ではありません。12世紀は大翻訳時代ともいわれ、知識がアラビア語からラテン語に翻訳されヨーロッパ世界に入ったのです。イスラーム世界の学問知識や技術や産物（例えば、砂糖やコーヒー）は、当時のヨーロッパ世界のものより優れていました。ヨーロッパは、それに劣等感を抱き、かつ嫉妬したはずですが、皆さん、コンピューター用語の「アルゴリズム」がありますね。その語は実は、9世紀のイスラーム世界の人物の名前からきています。Al-Khwarizumi（アル・フワーリズミ）で、ラテン語世界では「アルゴリズムス」で知られていた人物です。この人物は代数の書物を残しています。「大航海時代」は、ヨーロッパの世界のイスラーム世界に対する嫉妬により始まったと言っても過言ではないのでしょうか。

移動する監獄

実際に使われた奴隷船はどんなであったのかを説明します。種本は、すでに紹介した「奴隷船の世界史」です。奴隷船は「移動する監獄」とも呼ばれました。18世紀の奴隷船の大きさは平均100~200トンくらいで、船の長さは24~27メートル、幅は6~7.5メートルです。この大きさの船に少ないときは200人前後、多い時で600人前後のアフリカ人の奴隷たちが積み込まれました。船員の数は、奴隷の監視があるため通常の船の2倍、また武装もしていました。乗組員の約3/4は平の水夫でした。その他は、船長に航海士、それに船医もいたそうです。ただし、どんなレベルの船医だったのか分かりません。

アフリカ人たちがおかれた船内の部屋は、ネットにその図が出ています。例えば巨大なBrooks号の場合、メインデッキ（主甲板）の下に下甲板と呼ばれた船の壁面から内部へ180センチほど突き出た棚の部分があり、そこは座った状態で頭がつかえるくらいの高さでした。まず、そこが一層目で、さらにその下には、全面を使ったデッキのフロアー、さらにまた棚の部屋、そして船底の部分のフロアーで、全部で四層になっていました。奴隷にされたアフリカ人は、男だけではありません、女性も子供（少年と少女）もいました。男はみな反乱を恐れられ、一人の右手と右足が、もう一人の男の左手と左足と手枷や足枷でつながれました。二人一組でつながれ、寝かされて身動きできないような状態で16時間以上いなければならなかったと書かれています。用便はバケツを使ったと書いてあります。したがって、彼らが行った場所は、常に汗や用便の悪臭が立ち込め、吐き気を催すようなむっとする空気の中に閉じ込められていたのです。これ以上の阿鼻地獄（あびじごく）はなかったはずですが、したがって、我慢できずに反乱を企てる人も出てきたのですが、その大半は鎮圧され（成功した例は極めて少ない）、反乱の首謀者は見せしめにありとあらゆる責め苦を受け、場合によっては斬首されたとのこと。10隻に1隻の割合で反乱がおこったと書いてあります。また、航海の途中で病気になって死ぬ人や、海に飛び込んだ方がましたと思って実行したアフリカ人も出てきたとのこと。自殺予防のために、船の周りにはロープで編んだネットが張られていたのですが、こ

のネットを潜り抜け飛び込んだということです。女性と子供のいるところは、男の部屋と離れたところ、主甲板後方の下甲板にあり、手枷や足枷は使われなかったと
のことです。奴隷は全員一日二回水と食事が与えられ、生きながらえさせるために
一日に一回甲板上で音楽に合わせてダンスを踊らせられたそうです。また、伝染病
や赤痢や天然痘がはやらないように航海中に何度か海水や酢やたばこの煙などで洗
浄されたとのこと。もうここまでのハナシで、この歴史上の出来事は、「交
易」などというきれいごとでは済まされないハナシだと言うことが分かります。人
権も何もあったものではない出来事なのです。正に生き地獄です。

典型的な奴隷貿易は、イギリスが行った三角貿易に見ることができます。イギ
リスの港町から出港し、アフリカ西海岸で奴隷を集め、彼らを西インド諸島、例え
ばJamaicaで売却し、イギリスにもどるという航路です。かかる時間は、イギリス
→アフリカに約2ヶ月、現地でアフリカ人を奴隷として集めるのに2~3ヶ月、アフリ
カ→ジャマイカ航路に約2ヶ月、奴隷の売却に約2~3ヶ月、ジャマイカ→イギリスの
帰還航路に約2ヶ月で、全部で1.2~1.3年くらいかかったこととなります。その悪行
商売の構図は大体以下のようになります。

まず、奴隷商人がいます。彼らは奴隷貿易の投資家から投資を得ます。それで
船を作ります。船主は船長を選びます。時には、船主＝船長の場合もありました。
船長は水夫、船医、航海士を集めます。水夫は命をかけなければならない仕事でし
た。一航海で必ずと言っていいほど何人か死にました（航海の奴隷の死亡率は平均
5%前後、ひどいときは13%前後）。時には、奴隷以上に水夫が死ぬことがありま
した。例えば、すでに例に出したBrooks号（1781年に建造）では、10月に出港し、
Jamaica経由で帰港したのは翌々年3月です。そして乗組員58人の内、8人が航海中
に死んでいます。ですから、まともな人はやりたがらない仕事でした。そんな仕事
に就くのは、貧しい労働者、借金を抱えた人、浮浪者、監獄行きを逃れる人、ある
いはうまく騙された人などです（ヨーロッパから北アメリカ大陸に入植した人々も
同じような境遇からの人が約50%にのぼる）。

最初は、ヨーロッパの物品とアフリカ人奴隷を交換したそうです。例えば一人
の女性との交換には、ブランデー3樽、123ポンドの重さの装飾品、ハンカチ2枚、
綿織物8枚です。現地沖に着いたら、乗組員がボートで上陸し、現地の大小さまざ
まな民族の王様の代理人と交渉するのです。何人の奴隷と交換したいか、商品とし
て何を持っているか、サンプルを見せながらの交渉だったそうです。交渉が成立す
ると、契約数の人間が集まるまで海岸で生活する住居や倉庫が与えられたのだそう
です。奴隷にとられるアフリカ人の多くは、現地の民族間の戦争の捕虜とのこと
です。もちろん、誘拐された人や借金返済から逃れるために身売りする人、重罪人な
どもいたとのこと。ですから、交換用の奴隷を手に入れるためにわざわざ戦争
する民族もあったとのこと。

奴隷船の船長をやり、その後反省して牧師になった人物がいます。皆さん知って
いると思いますが、‘Amazing Grace’という讃美歌の作詞者です。その歌詞は、
“Amazing grace, how sweet the sound, that saved a wretch like me. I once was lost
but now am found, ...”です。この方は、過去の行いを悔い、奴隷貿易廃止の活動に
参加したJohn Newtonという人物です。‘wretch’には、‘someone who experiences
an unpleasant thing’「不愉快なことを経験した人物」という意味と、‘someone who
is unpleasant or annoying’「不愉快あるいは嫌な人」の意があります。おそらく、
この出だしの部分は、「おお何という神の愛、何と甘美な響き、私のような（奴隷

貿易をやった) 不埒の輩も救いたもう」の意であると考えられます。作者の自分の反省の弁は理解できますが、詞全体は作詞者自身のことばかりで、犠牲になった黒人の奴隷に対する語句が見つからないのが残念です。

廃止へ

補足が長くなりすぎましたでしょうか。もう少しで切り上げます。こんな悪事がいつまでも続くわけがありません。イギリスで18世紀後半に奴隷貿易と奴隷制に反対する動き(abolitionism)が出てきます。アメリカからイギリスに連れてこられた Summerset という黒人奴隷がロンドンで逃亡しとらえられ、その後 Summerset の奴隷主はこの人物を Jamaica で売却する目的で、Jamaica 行きの船に乗せました。ところが、この船に奴隷の支援者が乗り合わせていました。船内で鎖につながれているこの奴隷の姿を見て、裁判所に訴えてたのです。「サマーセット事件」です。

これが、イングランドで奴隷の存在を認めるかどうかの裁判沙汰に発展します。代理人により、奴隷は「雇用契約法」に反するとの訴えがなされます。時に1771年です。首席裁判官 Mansfield は、判決として、その奴隷の釈放を命じます(ただし奴隷貿易が廃止されたわけではない)。この事件がきっかけになり、abolitionist (廃止主義者) の輪は次第に大きくなっていきます。なかでも Quaker 教徒の参加が大きいかもしれません。この派は、17世紀のイギリスに誕生したプロテスタントの一派で、絶対平和主義といわれています。日本では「武士道」を書いた新渡戸稲造氏がそうでした。それから、Wedgewood の名で世界に知られている製陶業者の Jonathan Wedgewood も入っています。ウエッジウッド制作の反奴隷制を訴えたメダリオンには、鎖に両手両足をつながれた奴隷が片膝をついて “Am I not a man and a brother?” 「私は人間で兄弟ではないのですか」と訴える姿が作られています。‘quaker’ 「震える人」とは、何か信者を小ばかにしたような言い方で、いい名前ではありません(おそらく、お祈りをするときか何かの時に、体が震えたのでしょう)。奴隷制度に反対したのですから、他の宗派よりよほど立派な方々です。もちろん最初は、この派の中でも abolitionist は少数だったとのことですが。この派の創始者は、George Fox(1624~1691)で、信者は今や世界に60万人ほどいるとのことですが。ところで余談ですが、先ほどの “Am I not a man and a brother?” の英文ですが、日本語に訳すと、何とも座り心地の良くない日本語訳になってしまいます。そもそも日本の社会では、こんな文章が発せられることはなかったことが原因の一つです。それだけ日本社会は平和であったことにもなります。

続けます。1787年に abolitionist によりロンドン委員会が12人によって結成されます。先ほど触れたウエッジウッドもメンバーです。議会への請願活動を全国規模で展開します。ヨーロッパ各国やアメリカ合衆国の奴隷制度反対組織にも働きかけます。やがてイギリスでは、西インド産の砂糖不買運動も起こります。フランス革命が起こります。人権宣言が行われます。すべての人間の自由と平等に光が当てられます。その影響もあり、1791年、フランスの植民地であったハイチで黒人が蜂起します。フランスはイギリス、スペインとも戦争状態に入ります。フランスは黒人に武器を渡し、イギリス軍やスペイン軍と戦わせる必要が出てきます。1794年、背に腹は代えられず、フランスの国民公会は黒人奴隷制を廃止することを宣言し、植民地に居住する人は肌の色の区別なくフランス市民であることを宣言します。その後

ナポレオンが出て、奴隷制を復活させようとしませんが、結局1804年にハイチ共和国が誕生します。イギリスでは1807年に奴隷貿易が廃止されます（貿易ですので、奴隷制度はまだ残ります）。その他の国々では、デンマーク1802年、アメリカ合衆国1808年、ベネズエラ、チリ1811年、アルゼンチン1812年、スウェーデン1813年、オランダ1814年、スペイン1820年、ブラジル1830年に奴隷貿易が廃止されます。なお、奴隷制度の廃止は、イギリスでは1833年です。直接の原因は、18世紀英領西インド最大の砂糖の植民地ジャマイカでの反乱でした。アメリカは、周知のように南北戦争の結果が奴隷制に終止符を打ちました。当時400万人の奴隷がいたといわれています。奴隷制度廃止において最も遅かったのはブラジルで、1888年です。このように表向きは貿易も制度も廃止されたのですが、それですっかりこの悪行が世界から全くなかったということではありません。密貿易が行われたり、奉公人制度が作られたりしました。そして現在に至っています。

以上、皆さんにこの事実を知ってもらいたいという気持ちから、つつい長くなりました。なお、現在でも奴隷制は形を変えて存在するという学者がいます。University of NottinghamのKevin Bale氏です。彼の言わんとするところは、また別の機会にしたいと思います。

<オノマトペ>

和辻哲郎と自然



日本語には4500ほどのオノマトペがあるというのは、牧野誠一氏(1935~)です。氏は、「日本語を翻訳するということ 失われるもの、残るもの」(中公新書,2018年)の中で、日本語は視覚・聴覚型で、英語は視覚型だと主張します。そして、この視覚型では、音と意味の関わり方が弱いといっています。確かに現代英語では、日本語のようなオノマトペは少ないです。なぜ英語ではオノマトペが少ないのかについては、オノマトペは子供っぽい音になるからだとの説明する人もいます。つまり、犬を「ワンワン」とかネコを「ニャンニャン」と呼ぶのは稚拙なので、英語では避けられているとの説明です。しかし、これはどうでしょう。オノマトペは、人間精神が稚拙かどうかに関するのではなく、言語としてどう伝えたら最も効果的かという問題ではないかと筆者は思います。しかし、牧野氏のいう音と意味の関わりが弱いとはどういうことなのでしょう。そもそも文字以前の言語は音だけのはずです。言語は遡ればすべて音です。その音に意味を持たせただけです。

皆さんは、和辻哲郎(1889~1960)の「風土」(岩波書房,1935年)という本を読んだことがありますか。和辻氏は、東京帝国大学(現東京大学)の哲学科を出た哲学者です。ヨーロッパに留学に出かけ、自らの目でアジアからヨーロッパにいたる自然を見てきた人です。名著「風土」の中で、世界の間人文化をいくつかの類型に分け、自然環境の観点からその特徴を述べています。アジアでは日本と中国、インド、それから中東の砂漠地帯、そして地中海から北ヨーロッパまで目を移しています。その際、「湿潤と乾燥」をカギに、その地域の間人が自然環境との関係で、どのような精神的特徴を持つに至ったかについて書いています。

人間がどのような自然環境の中でどのように生きたか、このことは言語を含めあらゆることに関係があります。精神的特徴とは、言語を含めた人間そのもの特徴ということになります。膨大な年月の人類の変化の中で、どのように言葉が形成され

いったのか、言葉だけが変わっていったのではないはずです。人間は自然から生まれた動物で、その点他の動物と変わりはありません。人間の特徴は言語によるコミュニケーションと多くの方がいますが、他の動物も人間のような言葉や文字は使いませんが、'communication'をします。今や微生物も'communication'をすることが分っています（NHKの「ヒューマニエンス」という番組から）。繰り返しになりますが、人間の脳も自然のもので、自然と関係なく脳があるわけではありません。脳にも自然の影響が必ずあります。人間は住んでいるところの自然を利用して生きてきました。それ以外に生きる方法はなかったはず。その自然環境での生活がどのように言葉作りに反映したのかについて、和辻さんは一切何も触れていませんが、筆者はこの類型で指摘されていることが、言語にも関係があると見ています。日本語は、どうしてこのような言語になったのか、英語はどうしてあのような言語になっているのか、言語形成期の古代人が住んだユーラシア大陸の東西の自然環境と大いに関係があると見ています。

和辻さんによれば、日本は東アジアの'monsoon'（モンスーン）帯の国です（'monsoon'とは季節風のことで、語源はアラビア語）。夏の高温と雨、冬の低温と雪、その間に春と秋があり、季節の変化が地上で最も鮮明な国です（温暖化した今の日本のことではない）。例えば、昭和の作家の一人である井上靖(1907~1991)氏は、著作「日本紀行」(岩波書店,1933)の中で、以下のように語っています。

「日本の風景が世界のどこよりも美しいにちがいないと思うようになったのは、50代に入ってから。日本の風景を特別なものとして受け取るようになった。年齢もあるが、画家やカメラマン、歌人や俳人が日本の風景に対して持っている眼を遅ればせながら持ち始めた。」

そして、日本の自然は、「非常にデリケートな細やかな目盛りを刻みながら、春から夏へ、秋から冬へと移行する」と言っています。また、「人工的、工芸的なスペイン庭園を美しいと思った時期がある。しかし、四季それぞれの眺がない一つの置物でしかない」と加えています。

とすれば、イギリス庭園もしかりでしょう。「四季それぞれの眺めがない一つの置物」とは、名言ではないですか。自然が、ユーラシア大陸の西ではただの置物、東端では「千変万化する自然」なのです。しかし、日本の自然が作り出す風景が世界一であるということは、存外、ヨーロッパの光を当てないと分らないということも、井上氏の発言から読み取れます。ここが少し悲しいところです。日本の原風景の美しさが分かるのに、京都帝大（現京都大学）の哲学科を出た碩学の井上靖氏ですら50年かかっているということは、西洋の影響を骨身にしみるまで受けてしまった我々凡人は、そもそも一生理解が無理なのかもしれません。しかし何とか、この美しい日本の自然をこれ以上失わないようにしないとけません。

さて、ハナシをもどします。日本の夏の湿潤は、耐えるよりないもので、人間は受容的にならざるをえません、といます。しかし、この湿潤は、植物や動物を育てる湿潤です。自然が豊かだった日本の山を見れば分るはず。日本の木の種類はおそらく世界一です。「図説日本の樹木」鈴木和夫・福田健二編著（朝倉書店）2016年によれば、日本の木の種類は約1500種類にも及びます（残念ながら、今や日本の森林の約41%が人工林）。木が豊かであるということは、そこに住む動植物

も豊かであるということになり、山を流れて流れる無数の川が、その栄養素を海に運ぶということになります。それがプランクトンを発生させ、そしてそれが魚の餌になります。日本の海の豊かさは、世界に冠たるものです。残念ながら、今やそれも崩れつつあります。今や日本人は、モロッコのタコ、アルゼンチンのエビなど、海外の栄養が少ない海域で育った魚介類を食べさせられています。筆者は、モロッコのタコをはじめて口にしたとき、なんと味の無いタコなのかと思いました。味もそっけもない、とはこのことかと思いました（はげ山を流れる川が流れ込む海産物は、そもそも味が無いのです）。今ではすっかりそれに慣らされて、よく味が分からなくなりました。皆さんはどうですか。山が豊かでないところの川は、味の無い川なのです。おそらく日本は、漁業に携わる人間の数も世界一だったでしょう。日本人が海産物を食べて生きてきたのは、自然の恵みが豊かな海であったからなので、それはとりもなおさず山が自然豊かであったことを物語っています。日本料理が、素材の味を大切にすることはここにありま。ヨーロッパ料理や中華料理のように、味を濃くつける必要はないわけです。自然の味を生かせる風土、それが日本なのです。日本は、おそらく、世界で唯一それができる国でしょう。自然と人間が一体になっている国が日本だったのです。フランスの人類学者のレヴィ＝ストロースはかつて、日本には天然資源が少ないが、日本人という人的資源があった、と言いました。それは、自然と共に生き、自然に感謝して生きてきた原日本人のことを言ったのです。残念ながら、西洋の技術を盲信して、味者（まいしゃ）になりかけている今の日本人は、ほぼこれに当てはまらないのではないのでしょうか。正に「うるわしの日本や今いずこ！」です。

篠田謙一の「人類の起源」（中公新書,2022年）によれば、人類の歴史に関しては、2006年に次世代シーケンサー(Next Generation Sequencer)が実用化され、大量の情報量を持つ細胞核のDNA分析が可能になったとのこと。今後、もっと詳細な人類の過去が明らかになるかもしれませんが、現段階の定説では、「人類はアフリカで生まれ、人類の先祖はまず樹上生活をした。ところが、1000~500万年前、アフリカ中部で森林が減少し、草原ができ、それにより、人類は樹上生活から草原の生活に移った」と考えられています。人類がチンパンジーと別れたのは、一般に約700万年前とされ、最初のホモ族は240~150万年前に生まれたホモ・ハビリス(homo habilis)とされています。我々ホモ・サピエンス(homo sapiens)は、ホモ属の進化の中で、60万年前に分岐し、世界中に分布したとのこと。ホモ族が火を使ったのは、150万年前くらいで、農耕は約1万年前です。平均1360ccの脳だったそうで、ホモ・サピエンスの脳は、最初の猿人の段階に比べると約3倍になったとのこと。

アフリカを出たホモ・サピエンスが日本周辺に来るのが約4万年前、日本列島に日本民族のもとになる人類が住み始めるのが約2万年前とされています。アフリカを出た人類の先祖がヨーロッパにたどり着くのも約4万年前ですので、東西似たり寄ったりの時間が経過しています。日本列島は約3000万年前に大陸から切り離されはじめ（太平洋プレートのもぐりこみの圧力に対する反作用）、いくつかの島々になっていきます。その当初は平坦な大地だったといいます。しかし、フィリッピンプレートのもぐりこむ方向が300万年前ころ北から北西に変わり、それが原因で太平洋プレートの押し込む力が強くなり、日本列島にもぐりこむ場所が30キロ列島の方へ移動し、同時に、この東西圧力で日本列島に褶曲山脈ができた（北アルプスなど）、とされています。そして、今日の山が多い日本列島になったのは、約9万年前とされています。

縄文時代の日本は、そのような地球の営みの中から形成されたわけです。自然の豊かさは世界一だったといっても過言ではありません。そのような自然豊かな地に住む民族（第2回で述べた、覚張先生の主張する1000人の縄文人を先祖とする縄文人）はどのような言語を形成するにいたるのか、です。結果は、我々日本人が今現在使っている日本語のもとになっているはずで、その特徴は、当時の自然と結びついているはずで、

オノマトペ



以上の点を頭において、オノマトペのハナシをします。onomatopoeiaとは不思議なスペルです。「英語語源辞典」によれば、語源はギリシャ語のonomatopoiiaで、onmaはnameで、po(i)einは‘make’の意味です。したがって、name-makingですが、‘the making of words’の意味になるとその辞典には出ています。つまり、自然の音を感覚的にまねることが語形成につながっている、ということを示しています。オノマトペが英語では少ないということは、英語と日本語のやり方が違うだけです。自然の音をまねるといふ基本は同じとあってよいと思います。

例えば、英語でsough[sáu]という語があります。英語語源辞典によれば、その語は「風が吹いたり、水が流れたりする音」となっています。すなわち、この語は風の音、水の音両方に使われています。例えば、COBUILD(Collins Birmingham University International Language Database 1987、以下COBUILD)やGeniusでは「風のヒュウヒュウ／ざわざわいう音」としかでていません。しかし、WebのWordreference.comには、この語に関して、次の例文があがっています。

After one last sough, the woman died.

この例文では、soughが「息を引き取るときのうめき声」になっています。確かに、Websterでこの語をひくと、以下の説明があります。

sough

1moaning, murmuring or sighing sound (as of the wind)

moanは「うめく」、murmurは「ブツブツ不平をいう」、sighは「ため息をつく／風がそよぐ」の意味です。これを見ると、英語人には、人が死ぬときのうめき声も、木の葉のそよぐ音も、ブツブツ不平を言う時の声も同じように聞こえるということになります。あまり使われませんがbickerという語にもこれが起こります。この語は、もともと「些細なことで口論する＝petulant quarreling」という意味でよく使われる語で、Geniusでは「(文) <小川などが>さらさら流れる」があがっています。また、Websterには、bickerの二番目の意味として、‘a sound of or as if of bickering’と出ています。ということは、「ささいな口論」に聞こえる音も、小川の流れも同じ音のように聞こえるということになります。

もう気がつきましたね。英語世界では、自然が作り出す音を聞き分けるのに日本的な繊細さはないのです。日本語の世界では、「うめき声」と「小川の流れ」の音

を同じ語で表すという雑な(?)ことはやりません。レヴィ＝ストロースは、この点について、日本人は感情と感性の領域で他のどの民族よりも分析を好む傾向にある、と言っています。「分析を好む」とは、音に対して雑な扱いをしない日本民族の感性のことを言っているのだと思います。日本人は、きめ細かく差異を探る感性を自然から学んだのです。そして、このことがオノマトペとして言語に出ているのです。オノマトペが日本語に多いのは、自然の一つ一つを言葉に生かす古代日本人の精神の現れということが出来ます。これに対し、例えば英語の世界では、音は単なる鼓膜を振動させる波といった感じでとらえられています。周波数が同じくらいなら、すべて同じにするという感覚です。これは、音と感情や情緒との線がつかっていないことを示しています。ですから、英語人には、一般論として、秋の枯れ葉の舞い散る音に、人生の儚さを感じたり、秋の夜長の虫の音に一抹の寂しさを感じ取ったりする心のひだはないのです。虫の音は一種の雑音にしか聞こえないのです。確かに、この二つ(虫の音と寂しさ)には、物理的なつながりはありません。これは音が心にどう響くかの問題です。論理を重視する世界では、この音と感情の関係は一般にoff-lineなのです。

さて、これはどういうことなのかです。第2回で少し触れましたが、我々が聴く音というのは、脳内で処理された音です。水が発した音そのものではありません。音が耳から入り鼓膜を振動させ、その後信号処理された音を、最終的に脳細胞が処理し、言語意識にoutputした音です(視覚でも同様。視神経を通して視覚細胞が0.03秒程度で処理した画像。現実に見ているものは、脳の画像処理で、コマ送り。現実とはほんの少しズレがある)。outputはそれぞれの言語で行われるわけだから、それぞれ結果は違ってきます。仏教の唯識論では、この点を見抜いて、視覚も聴覚も脳が作り出す現実遊離の妄念だと言い切ります。現実に近いものだが現実そのものではない。それは、あくまで脳が処理した後に残る残像や痕跡のようなものだと思えるわけです。

感覚処理と物理処理

これまでの説明で気がついたと思いますが、一般論的に言えば、日本語のパターンは感覚処理的で、英語パターンは物理処理的だと言えます。「サラサラ」と「ブツブツ」は、感覚的には相反する音です。だから、例えば日本語では、同じ語が両方の音を表すことはありません。しかし、英語では、「パカパカ」と「コツコツ」を同じ種類の音とみて(音自体は似ている)、英語では一語ですませています。例えば、'clap'「パカパカ、コツコツ」、'pitter-patter'「ドキドキ、パタパタ」、'jingle'「リンリン、チリンチリン」などがあります。究極は'crack'です。Geniusでは、「ドカン、バリバリ、ズドン、パチッ、ビシャ、バンバン、ガラガラ、ポキン、バシッ、ピシッ」にあたると出ています。つまり、何かが裂けたり壊れたりする鋭い音なら何でもあり、ということになります。

脳内の処理の過程そのものは意識できません。あくまで我々が知るの、脳処理の最終結果です。感覚的ということは情緒処理的で、物理処理的ということは、複数の音をイコール(=)で結ぶわけですから、概念処理的のです。

例えば、「旗や横断幕などがパタパタ揺れる」は'flap'が普通ですが、'snap'を使う人もいます。'snap'は通例、「ポキン、プツン、パキン」と音が鳴ったり、何かが折れたり、壊れたりの意味です。しかし、N. Richard Nash(1913~2000)の小説

「Cry Macho Penguin Book (2021)」に以下の文があります（この小説はClinto Eastwoodの映画「クライマッチョ」になっています）。

“The huge overriding banner—Polk’s Cow Stadium, in shiny psychedelic silks—snapped in the wind.”

[拙訳]

「ピカピカの派手なシルク地にポークの闘牛場と書かれた巨大な威圧的なバナーが風にバタバタと揺れていた」

ここでは、「バナーが揺れる」のに対し、‘flap’ではなく、‘snap’が使われています。‘fl-’が‘sn-’になっても概念的に同じものとしてとらえることができます（ただし、「子音+母音+子音」の形は守っている）。「sn-」自体は基本的に「ヌルっとした」感じに合っているのですが、‘p’音と一体になった‘snap’は「パキン、ポキン、カチン、ガチン」で、木の枝がポキッと折れる音や、ドアなどがピシャッと閉まる音にも使われます。

しかし、念のため、旗が揺れる音に‘snap’を使うか、筆者の友人で、Chicago大学出の若いアメリカ人に聞いてみました。「自分は‘snap’は使わない、‘flap’を使う」という答えでした。上の文では、巨大なバナー（横断幕）が風に揺れる音なわけですから、著者のNashさんはその音として、‘flap’より‘snap’がいいと思ったのでしょう。その辺を考慮して、私の訳は「バタバタ」にしました。このように、英語では一語が複数の音に概念的対応をしますので、日本語のオノマトペよりも使用に個人差がでるのかもしれませんが。

さて、どんな種類の音かは、どうも語尾の子音がキーになっているように感じます。‘p’は、軽い高めの瞬間的な音です。ですから、上の例のように、flapもsnapも同じように使えるのかもしれませんが。語頭の[fl-]や[sn-]は、「素早い動き」に関連していると思われます（次章参照）。「snatch」は「ひったくる」を意味しますが、これも同系列の語でしょうか。「（サーッと）ひったくる」素早い感じですが、-tch [tʃ]でその感じを表しています。‘snore’の‘r’と組めば、「いびき」のうるさい音になります。

‘sn-’の本来の「ヌルヌルした感じや動き」は、‘snail’や‘snake’に出ています。‘l’と組み合わせられた‘snail’は「ヌルヌル」そのものですが、‘k’と組み合わせられた‘snake’では、「鎌首をもたげて飛びかかる」感じが出ています。‘snarl’は犬が歯をむき出してうなる時の音です。やはり、‘r’が入っています。しかし、おそらく吠え声でも‘growl’よりは弱い感じの音なのでしょう。この場合は、語頭の‘sn-’と‘gr-’にその違いがあるように思います。

脳は自然をまねる



以上のようにいろいろですが、人間の脳が自然の音にできるだけ近い音にまねようとしたことはハッキリしています。英語の子音は自然の音をまねることによって生まれたというアメリカの学者がいます。すでに引用した牧野成一著「日本語を翻訳するという事」（中公新書,2018年）には、次のようにかかれています。

『アメリカの神経生物学者のマーク・チャンギージーは、言語人類学者のエドワード・サピアが言語音の自然発生説に反対したのに対して、「ぶつかる」(hit)、「滑る」(slide)、「鳴る」(ring)という物理的な出来事が出す音から、それぞれ[p]/[b]、[t]/[d]、[k]/[g]のような破裂音、[s]/[z]、[f]/[v]、[sh]/[th]のような摩擦音、そして[r][l][y][w][m][n]のような共鳴音ができあがったのではないかという興味深い説を提案しています』

これを指摘した人は、理論的認知科学者(theoretical cognitive scientist)の Mark Changizi氏(California Institute of Technology「カルフォルニア工科大学」)です。氏は、英語の[fl-]の音では「動く光(flash、flareなど)」、[sl-]の音では、「湿ってすすべるもの(slime、slide、slushなど)」、[kr-]では「やかましい音(crash、crack、crunchなど)」、などをあげています。つまりこれは、英語ではオノマトペが一つの単語としてできあがっている、ということの意味します。例えば、‘flash’は「ピカッと光る」です。日本語では「ピカッと+光る」の構造で、「動詞+オノマトペの副詞」の構造になっています。したがって、オノマトペそのものが単独の副詞として使われているので、語がオノマトペだと分りやすい構造になっています。この点、英語はややわかりにくくなっています。例えば、先ほど例に出した‘crack’に似た単語に‘crash’があります。違いは‘-ck’と‘-sh’です。車の衝突は‘crash’で、雷が落ちる音は‘crack’です。‘crack’の方が、「ズドン」があるように、大きな音です。この違いを、‘-ck’ [k]と‘-sh’ [ʃ]の音の違いで表しています。母音を入れなくて‘crck’や‘crsh’では、さすがに発音しにくいので、つなぎに‘-a-’をかませたわけです。そして、押しつぶしたりするのは‘crush’ですので、母音によって、微妙な力学的な違いを出します。これが英語的オノマトペです。英語にオノマトペが少ないのは、処理の仕方の違いでしかありません。

「人間は自然をまねる」、ここに大きなヒントがあります。氏は母音のことは何も言っていないが、おそらく子音だけではなく母音も含め、すべての音は古代人が、自然がつくり出す音をまねることからはじまったものと思います。脳は自然の音をまねることによって言語形成の一步を踏み出したと思います。言語の音は感覚所与(sense datum)なのです。例えば、すでに第1回で少し触れたことですが、[gn]という子音の組み合わせがあります。これは日本語にすれば「グニュ／グニョ」の音、すなわちオノマトペに聞こえます。この[gn]について、渡部昇一氏(1930~2017)の「英語の起源」(講談社現代新書,1977年)に以下のように出ています。

『このギリシャ語の女(グネ)の語源をさかのぼると、どうやら*gne(グネ)-,*gno(グノ)-,*gen(ゲン)-という一群の語根に突き当たるようである。その根本の意味は「産む」ということである。女性のきわだった特徴は「子供を産む」ことであるから、古代の人が「女」と「産む」を同一語根から派生させたと考えても自然である。』

古代人にとっては女性が子孫を産むということは、重大事であったはずですが。この「グネ」の音が、子供が女性の体から生まれてくる時の音(?)に関係するオノマトペなの可能性があるのではないかと筆者は思っています(あるいは、別な可能性も考えられます)。つまり、渡部昇一氏はそこまで言わなかったのですが、い

ずれにせよ、女性を「グネ／ギュネ」という音で古代ギリシャ人が表した理由として、物理的な音があったのではないかと思われそうですが、どうでしょう。ついですが、筆者は、日本語の「生む」の音「ウム」もオノマトペではないかと思っています。

これも第1回の繰り返しになりますが、この[gne]からは、英語で現在も使われている数多くの語が派生しています。‘gentleman’「紳士（生れのよい人）」、‘generation’「世代」、‘generate’「発生させる」などがあります。‘hydrogen’「水素」、‘antigen’「抗原」、‘allergen’「アレルゲン」などでは、[gn]が語尾にきています。これらの語はいずれにしても「産む」の意味を持ちます。さらにこの音は、[g]音が落ちて、‘nature’や‘nation’になっていきます。これについては、梅田 修の「英語の語源辞典」に以下のように書いてあります。

『cognate（同族の）やpregnant（妊娠している）の語幹-gn-はOL gnātus (born) が語源である。OL gnātusは、古典ラテン語ではg-が脱落してnatūsとなる。すなわち、nature<p.57参照>やnation（国家）と同語源の言葉であり、...』

注：OLはOld Latin、古典ラテン語は、ローマの最盛期のラテン語のこと（注は筆者）。

「グネ」というのはいかにも発音しにくい音の組合せです。したがって、発音やスペルで‘g’が落ちたりします。現代英語の‘gnarl’「木のふし」、‘gnash’「歯ぎしり」、‘gnaw’「かじる」‘gneiss’「片麻岩」などの語では、すべてスペルに文字は残っていますが、[g]の発音は落ちています。gnatus → natus → natureでは、‘nature’「生まれ」が先で、やがて「自然」の意味になっていきます。梅田氏の同書のp.57を引用します。

『... L nātūraは、生まれ育ち、やがては朽ちる物「自然の物」という意味になり、「自然界の総体」という意味になり、抽象的に「自然」を意味するようになるのである。...』

ギリシャ・ローマ世界では、「生まれる」と「自然」をつなげることに時間がかかっています（キリスト教世界では、神様がすべてを作ったとしていますから当然ですが）。「すべてを産むのが自然」であるという分りきった道理を理解するのに時間がかかったのは、自然が日本とは異なるからだと思います。すでにふれた日本語が視覚・聴覚型であるとの指摘もこれに関連します。すなわち、視覚と聴覚すべてを使って自然をとらえる姿勢です。これにはそもそも自然に対する敬意がなければできません。繰り返しますが、モンスーン気候の自然では、自然が「生」として迫ります。そこで育った民族の言葉には、その敬意の姿勢が現れ出ることになります。たしか司馬遼太郎氏の「街道をゆく」シリーズのどこかに、北海道の少数民族であるウエルタ族の婦人が車で出かける時、新たな山を見れば車を止めてもらい、山に向かってお供え物をして祈った、という趣旨のことが書いてあったと思います。この自然に対する敬いの気持ちこそ、過去の日本人（縄文人）が本来持っていた自然に対する姿勢です。

東洋では、道教の老子（中国の紀元前の春秋戦国時代の哲学者と一般的には考えられている）が「生命」と自然を結びつけています。人類学者の伊谷純一郎氏

(1926~2001)の「自然がほほ笑むとき」(平凡社,1993年)には以下の記述があります。

『自然という語が初めて現われるのは「老子」だという。有名な「無為自然」の自然である。その第二十五章には次のような叙述がある。域中に四大あり、それは道、天、地、王だとする。王は人の象徴であろう。その四大には階位が付されている。人は地に法り、地は天に法り、天は道に法る。つまり、人は最下位、道は最上位の概念ということになるのだが、その最上位の道は、おそらく四大を超越した自然に法るとされているのである。』

これが東洋の自然の概念です。伊谷氏は「現在、自然は人に法るとする誤謬が公然とまかり通っている」と嘆いているわけです。「のっとる」とは「従う、規範とする」の意味です。東洋が西洋を真似たというか、席卷されたというか、毒されたというか、今やヨーロッパ生れの人間の驕りに世界中の人間が支配されているということです。あまり気づかれていないかもしれませんが、「自然保護」とか「自然災害」などの表現は、まさにこの人間の驕りを示す言葉です。そういませんか？

言語と音楽



「脳は自然をまねる」ということになります。牧野成一氏が引用したM. Changizi氏の本は、「Harnessed」と題されていますが、副題は「How Language and Music Mimicked Nature and Transformed Ape to Man.」 「いかにして言語と音楽は自然をまねて、猿を人間に変えたのか」となっています。「脳が自然をまねる」ということは、人間がつくった文明も自然をまねることになるのではないのでしょうか。以下、彼が言うところを引用します。

Does civilization mimic nature? I believe so. And I won't merely suggest that civilization mimics nature by, for example, planting trees along the boulevards. Rather, I will make the case that some of the most fundamental pillars of humanity are thoroughly infused with signs of the ancestral world ...and that, without this infusion of nature, the pillars would crumble, leaving us as very smart hominids (or "apes," as I say at times), but something considerably less than the humans we take ourselves to be today.

In particular, those fundamental pillars of humankind are (spoken) language and music. Language is at the heart of what makes us apes so special, and music is one of the principal examples of our uniquely human artistic side.

[拙訳]

「文明は自然をまねるか？ 私はそう信じる。私は単に、文明が、たとえば通りに木を植えたりして自然をまねると言いたいのではない。むしろ私は、人類の最も基本的な柱のいくつかは、先祖伝来の世界の痕跡がしっかりとしみこんでおり、この自然のしみこみがなかったなら、柱は崩れ、我々とても利口なヒト（私がときに言う「猿」）は、我々が今日人間とみなすものよりはるかに劣るものの域を脱しないと言いたい。

特にそれらの人類の基本的柱は（話し）言葉と音楽である。言葉は我々猿を特別

なものにしているものの中心であり、音楽は我々人間だけがもつ芸術的側面を示す第一の例である。」

「言語と音楽は自然をまねる」や「人類の基本的柱は言葉と音楽」とは一体どういうことを言いたいのでしょうか。「言語が基本」はよしとしても、音楽があるのは不思議に思う人がいるのではないのでしょうか。誰しも'music'という語を知っています。また、「博物館」や「美術館」を意味する'museum'という語も知っているはずですが（そもそも「博物館」と「美術館」が同じ単語であることに違和感を持ったかもしれませんが）。実は'museum'は'music'と語源的につながっています。渡部昇一氏は、すでに引用したタキトゥスの「ゲルマーニア」によれば、古代ゲルマン語の世界では、「人」は'mannus'と呼ばれたと言っています。この語は、古代ゲルマンの神話に登場する創始神であるトゥイスコーの子マンヌスの名前前で、これが人間の先祖だと見なされたからとのことです。そしてこの'mannus'の語根は*men-で、「考える」の意で、人間の特徴を「考える」こととしたことが分かります。「考える」や「知力」系の語'mind'や'mental'もこの系列ですが、それだけではありません。考えることを特に必要とする'mathematics'「数学」もそうで、そして'music'もこの系列の語なのです。以下は「英語の起源」からの引用です。

『西洋の音楽の特徴は数学との関連にあると言われる。英語では音楽(music)という単語は、元来、「ミューズ女神たちの技術」という意味であるが、このミューズの女神の語源自体が数学と同じく「学ぶ(マイセン)に連なっている。ミューズの女神たちは多数いるが(ヘシオッドによれば9人)、... (中略)

古代のギリシャでミュージックが非常に重視されたことは明らかである。プラトンも「国家」の中において、「肉体のためには体技(ギムナスティック)を、精神のためにはミュージックをやるのがいちばんよい」といい、この場合のミュージックには、音楽のみならず、文学を含めることを意味している。このプラトンの用法からみても明らかのように、ミュージックは学習するものすべて、つまり学芸一般を意味していたのである。... (中略)

狭い意味でのミューズの技術、すなわち音楽もギリシャではきわめて重視されていた。感情と人格を磨き上げるために最も重要な手段として考えられており、単なる娯楽手段ではなかった。』

さらに、「ローマ時代と中世を通じて、音楽は厳密に学習される学科と見なされ、自由四学科の一つとして尊重されてきた」とも書いてあります。要するに西洋では、ギリシャ以来、音楽は堂々たる一つの主要学科として認められていたこととなります。当然、大学の学問の分野であったこととなります。日本ではご存じのように東京芸術大学がありますが、大学として設立されたのは1949年です。この学校の前身は、国の指導でできた美術学校と音楽学校で、それが合体して東京芸術大学になっただけのことです。両学校ともできたのは1887年なので、ギリシャとはこの分野において1000年以上の差があります。日本では、言語に対してと同じように、音楽に対してもしいてこれを取り上げて何か学問の対象にすることなど考えませんでした。ただし、これは音楽を知らなかったということではありません。音楽に対するアプローチの仕方が異なるのです。レヴィ＝ストロースは、西洋のクラシック音楽は素晴らしい。しかし、日本の古い音楽は全く異なるすばらしさを持ち、それはアジアで唯一である、と書いて感心しました。レヴィ＝ストロースは、日本の

音楽には「和音」がないことを指摘しています。すでに日本料理のハナシを出しました。素材それぞれを生かすわけです。音楽においても、いくつかの音をミックスして「和音」を作るということをやりません。それぞれの音を生かして音楽を作るのです。そして、このことは絵画にも言えるのです。日本では、色と線を別々に生かす工夫がなされるとのことです。日本では、音楽は学問として扱われてこなかったわけですが、決して西洋に劣るものではないわけです。

何度も言いますが、言語はまず音です。動物も音を出します。その点、人も動物も変わりありません。しかし、人間だけが顔の筋肉、口の形、舌の厚さ、喉の空間や声帯などを使って、さまざまな音を出すことができるようになっています。他の動物は構造がそのようになっていません。例えば、ネコの顔と口を見ればすぐ分かります。鼻歌が出るような感じではありません。動物は、食べものの場所と、敵から逃げることに、それらのことを何らかの形（音である必要はない）でコミュニケーションできること、そして子孫を残すことができればそれでよしです。人類はこのシンプルな段階を越えてしまいました。これは大脳皮質の発達により、高度な意識をもつようになったからと説明するのが一般的なのですが、それだけでは何か納得できない部分が残ります。

以下は、「バカの壁」で有名な「ヨーロー先生」こと解剖学者の養老孟氏(1937~)の言。

「人間が言葉として発する音は一つの記号であり意味が付与されている。この意味では言語音は概念である。音そのものイコール意味という方程式が使われている。人間は通常このことになれていて、何も違和感を持たない。しかし、感覚所与の動物ではこのイコールが成立しない。感覚の世界では、すべて異なる。「cat=ネコ」や「a=b」が成立しない。そもそも人間の感覚も一人一人で異なる。したがって、人間同士がコミュニケーションを行う場合、何か共通のモノがなければ成立しない。それが言葉なのである。」

森羅万象に造詣が深い養老孟氏の言です。筆者も授業でこれを利用してもらっています。感覚から概念へ、これが脳の第一の進化です。言葉の世界はイコールの世界です。繰り返しになりますが、口から発する音は、口から出た瞬間から他の影響（風など）を受け変化します。その音（口から出た音そのものではない）が空気の振動として鼓膜を刺激し、電気信号として脳の聴覚情報を処理する細胞に送られます。我々が聞いているのは厳密には発せられた音そのものではありません（このことはすでに述べた）。既に聞いた音＝（イコール）本物の音、とされているわけです。動物にはこれできません。人間は、例えば、男の人がcatというのと女の人がcatと言うのとでは、周波数が異なり音的に違うですが、アイデアとしてイコールで結ぶことができます。

音楽はどうでしょうか。音楽は音です。高い声で歌っても低い声で歌っても、曲が同じなら同じ曲だと分かります。イコールで結べます。少しキーが外れても、あの曲だということが分かります。感覚所与では違っても、概念として同じと理解する脳の作用、これが音楽の世界にもあるということになります。言語も音楽もこの点共通しています。確か既に少し述べたと思いますが、東洋では言語の根はアラヤ識という感覚の世界にします。感覚の世界は音に反応します。例えば、多くの場合、W. ShakespeareやW. WordsworthやP. Shelleyの美しい詩より、Johann Straussの「美しき青きドナウ」を聞いた方が、文句なしに体が動くに違いありません。そ

れは、言葉の場合は意味を介するからです。例えばPercy B. Shelley(1792~1822)の“To a skylark”「ひばりに寄せて」は、“Hail to thee, blithe spirit”で始まりますが、意味が分らなければ、感動のしようがありません。意味は学習しなければ身につけません。音楽の場合は、音のみです。意味に近いのは、ビートとメロディーと言えるかもしれませんが、とにかく概念の世界を介することがありません。感覚の世界だけで脳が反応することができます。だから、誰しも学習なしに感動できます。概念の世界と感覚の世界はつながっていますが、感覚が先行することは明らかです。言葉でも感情がわき上がる経験は誰にもあると思いますが、音楽の方がはるかに万人の琴線に通じます。感覚は人間が生まれ持っているもので、普通は意識がコントロールできないものです。

音楽はまた想像力を刺激します。喜び、悲しみ、恐れなどの感情が音（楽）と共に沸いてきます。大聖堂の儀式や宮中の儀式に音楽は欠かせません。人はある種の音に厳かさを感じます。最近の認知科学では、ウソをつけば、人の顔の表情同様に人の声にもでることが分かってきました。意識してウソをつけば声に出るのです。無意識に人の感情が音の動きとして声に表れるのです。声帯の振動は無意識に組み込まれた部分を持っています。人は気分がいいとき自然と鼻歌が出たりします。気分がいいときに、脳がかってにやるのです。人間は音的な存在であることは紛れもない事実です。Changizi氏はそのことを言っているのだと思います。だから、“Man is harnessed with language and music.”「人間には言語と音楽が備わっている」と言うのです。ギリシャ文明は、このことにすでに気がついてたということなのです。

パターン



Simon Prentisという人物が‘Speech!’という本を書いています。確か、どこかの国立大学の二次試験の英語の問題に利用されていました。「ドレミファソラシド」は煎じ詰めれば音の振動数の比率にすぎなく、音楽家はすべてその比率を操る数学者であると言っています（これで、感動や情緒とoff-lineになっていることが分かりますね）。「ドレミファソラシド」が8音階の時は、「ド」から「ド」までは1オクターブ(octave)で、仮に、その比を1対2とすれば、「レ」は9:8、「ミ」は5:4、「ソ」は3:2、「ラ」は5:3だといえます。これでは、比率が均一になりません。現在の12音階は、半音を入れて均一になっているといえます。なるほど、音楽と数学が元は一つであるとはこのことなのか、と思ったりしますが、どうも筆者のような凡夫にはピンときません。では、振動数の比率にすぎない音がなぜ人を感動させるのであろうか。これに対し、以下のように答えます。

Perhaps it's because our brains do best to find patterns, and we are simply exploiting a sensitivity to such distinctions that developed through language, enjoying what Steven Pinker called ‘auditory cheesecake’.

[拙訳]

「おそらくそれは、我々の脳が最善を尽くしてやろうとしていることは、パターンを見つけることで、我々は言語を通して発達した識別に至る感受能力を活用し、スティーブン・ピンカーがいう「耳のチーズケーキ」を楽しんでいるからである」

Steven Pinker(1954~)氏という人は、米国のHarvard大学の実験心理学者で、言語も研究している人です。'auditory cheesecake'「聴覚(耳)のチーズケーキ」とは聞きなれない比喻です。音楽は「耳が聴いて楽しむものチーズケーキのようなもの」としたのでしょう。比喻です。訳が直訳調で、Prentis氏が何を言っているのかよく分からない日本語になってしまっていますが(すみません)、要するに、「言語で意味を識別できるように、音楽には感情を識別するするパターンがある」と言っているのだと思います。確かに、厳かな気持ちになるのは、行進曲を聴いているときではないですし、優雅な気持ちになるのは、教会音楽を聴いている時ではありません。その場、その雰囲気に合わせて必ずパターンがあるということです。そういえば、日本の演歌には、人に人生の不如意(ふによい)を感じさせる独特のメロディーのパターンがあります。また、教会の音楽と神社の音楽には、似たパターンがあるような気がします。

すでにレヴィ=ストロースのハナシを何度も出しました。氏は、何事にも日本は西洋と全く異なるアプローチをする、とっています。これはどのような意味であるのか、です。すでに様々な人によって指摘されているように、西洋は思考が自己中心的に広がっていき、日本は真逆で、自己は結果的に最後に到達されるものです。レヴィ=ストロースは、西洋の自己は「原因」で、日本のそれは「結果」であるといっています。この考えに筆者も賛成です。さらに言えば、西洋は自己中心的であるから、アピール度の高い音楽を作るのだと思います。メリハリのあるリズムや音の組み合わせをパターンにします。また、音をブレンドして和音を作ります。自己の外の世界は、自己をアピールする世界、自己が利用する世界なのです。他方、日本は自己の外の世界に中心をおきます。そして、その世界の代表は自然なわけですが、したがって、自然を敬い、それに従うのです。個々の自然物を大切にします。日本の音楽は、ファンファーレのようなアピールをやりません。三味線、尺八、笛、和太鼓などの楽器は、真逆のアピール度を持つ楽器なのです。片や「動」ならば、片や「静」です。片や外に向かうのなら、片や内に向かいます。要するに、響きの方向がまったく違うのです。前半で述べた谷崎潤一郎のいう「陰翳」とか「虚無」も同じことなのです。そもそも見るところが違うのです。自然をよく見るまなざしについては、日本人には天性のものがあると言えます。これは、人間を中心に置かないからできることなのです。

人類学者レヴィ=ストロース氏は、「月の裏側(L'autre face de la lune)」(中央公論社,2014年)という面白い本を書いています(すでに触れました)。1977年から1988年に日本を五回訪れ、1979年から2001年の間に書いたものを集めた本です。実はレヴィ=ストロースの父は、印象派の画家でした。そして、レヴィ=ストロースが6歳だった頃、父から一枚の広重の版画をもらい、それに美的感動を得た、と書いてあります。それ以来日本に強い関心を持ち、版画や絵物語などの日本のものを集めた、と書いてあります。しかし、レヴィ=ストロースが日本に来たのは、本人が晩年になってからです。井上靖もそうでしたが、晩年になると見えてくるものがあるのです。ここがポイントです。レヴィ=ストロースは人類学者ですから、日本の神話も研究対象です。世界中で似たような神話は多々あるわけですが、たいいていものは断片的で、日本の神話が最も完成された形で作られていると述べています。そして、神話が日本の歴史のはじまりとしてしっかりと位置を占めていることに驚きと関心を示しています(普通は、歴史のはじまりは、事実として確認できることから)。氏は、イスラエルのキリスト誕生の地を訪問した時よりも、九州の

霧島の峰々の自然が大いに関係しているとも言っています。

AIとShakespeare

音楽のハナシのところで、パターンのハナシをしました。これを別な角度からみるとどうなるでしょう。パターン化できるということは、コンピューター処理ができるということになります。音の感覚でとらえる音楽がパターン化できるということは、共通の意味を伴う言葉ならばもっとパターン化できるということになります。例えば、悲しみの表現、怒りの表現など、一定のパターンに分析できるでしょう。人間の行動もパターン化できます（例えば、年齢あるいは男女により一定のパターンがある可能性がある）。ですから、あらゆることがパターン化され、AIにできないものは何もなくなくなる可能性があります。テレビで、イギリスのある学者か技師風の人が、これからはあらゆることにAIがつかわれると豪語していました。畢竟、何でもかんでも0と1でパターン化できるようになる、と言っているわけです。それこそ味も素っ気もないただのデータ処理の世界になっていくわけです。それを何とも思わないのが英米中心の西洋です。

例えば、AIにシェイクスピアのような言い回しで人生を語る一編の詩を作るように指示をすれば、それなりのもの（贋作）を作ります。しかし、Shakespeareはデータなどなくても次のように詠います。この文豪の頭の中で行われたことが、0と1によるパターン化であったとはとても思えません。

以下の詩があります。

Like as the waves make towards the pebbled shore
So do our minutes hasten to their end;
Each changing place with that which goes before,
In sequent toil all forwards do contend.

[拙訳]

「小石の海辺に波がうちよせるように
我らの時も終わりに向かって急ぐ
時それぞれが前の時と交替し
どれも途切れなくあたふたと先へ急ぐ」

この独特の言い回しは、データなんかで出てくるものではなく、Shakespeareの言語脳細胞の感覚から無意識的に湧き出た天性のものだと筆者は思っています。AIは機械ですから、気晴らしも喜びも必要ではないし、笑うことも泣くこともありません。Shakespeareは、人生を感覚として感じながらこの詩を作ったのです。AIはただデータ処理するだけです。ここに根本の違いがあります。いつだったか忘れましたが、Shakespeareの本物の詩とAI制作の贋作を、どちらがどちらか当てる問題を見ました。確かTOEFLの問題集に出ていた英文だったと思います。どちらも甲乙つけがたい感じでしたが、筆者はやっと勘で当てることができました。

人間の持つ勘はデータ化できないと思いますがどうでしょう。データ化されるということは、基本的に数値化されるうるものだと思います。画像もドット（点）として数値化されるし、音も周波数ですので数値化されるわけです。数えられるわ

けです。研究者はこの方式で、森羅万象すべてをデータ化できるように研究しているので、もしかしたらそうなるのかもしれませんが。人間もデータ処理される存在になりつつあるのが現在という時代です。うがった見方をすれば、データ処理で人の行動を読み、これを支配や軍備や政治や営業に使おうという魂胆だと考えられます（要するに、何でもビジネス）。しかし、超スピードで計算ができたり、人間の注文に応じて合成写真を作ったり、3Dプリンターで人工血管や神経を作ったり、画像で医者医療診断や手術の手伝いをしたり、人間の脳波を読み取り、その人が考えていることを表現してあげたり、人が望む言語でしかもその人の声で話すことができたり、これまでにはないスーパー技術を披露しています。正に、「より早く、より便利に」を越え、「究極の万能便利機械」をめざしているわけです。しかし、限りない欲望です。筆者のような昭和のオヤジは、その行き着く先は、とつい考えてしまいます。人間とAIがどのように共存共生していくかが今後の課題ですが、だれにもそれは分かりません。なるようになるだけなのです。

機械に頼れば頼るほど、昔から言う「人間味」がなくなっていくます。養老先生は、「今どきの医者は患者を見ないで、データしか見ない」と嘆いていました。どこかの車会社の宣伝文句を利用させてもらえば、「データバッカ」です。人間味という「人生のチーズケーキ」がデータ処理される日が来るのでしょうか。来ないでほしいというのが、筆者の願いです。

養老流に言えば、科学は本来意識の世界がなすことです。西洋の世界は、欲界と色界しかありません。この二つは、意識の世界です。ですから、西洋で科学が発達しました。この世界を突っ走っているのが西洋です。ですから、漱石が言うように娑婆の世界だけです。東洋世界は、三界です。この二つに無色界が入ります。そして、「三界虚妄（さんがいこもう）」とされています。西洋では、AIの力を借りて、意識が無意識のプロセスを解明しようとしています。意識の産物が、無意識を解明しようとするわけです。果たしてそれができるのでしょうか。第一、意識そのものの実態すら分かっていません。しかし、おそらく、ここを解明したいのが現代の科学なのでしょう。それが分かれば、人間のすべてをコンピューター化できるわけです。しかし、無意識が意識をコントロールしているということを忘れてはいけません。

ウィンフィルオーケストラ



音楽のハナシのついでです。皆さんも知っている有名なウィンフィルの英語名は、'The Vienna Philharmonic Orchestra'です。philharmonicは、語源がギリシャ語です。'philos'は'loving'、'harmonikos'は'skilled in music'の意味です。'harmonic'が「調和がとれた」の意味になるのは、18世紀以降、すなわち楽団音楽が出てきてからのようです。（日本語では、「管弦楽団」という。使う楽器による命名です。）すでに述べたように、管も弦も打も、自然の音をまねて作った楽器と考えられます。モンゴルの草原や中央アジアや中東を吹き渡る風の音をまねて、ラバブやリュートと呼ばれる楽器ができました。それがヨーロッパに入りバイオリンとなったと言われています。弦は、おそらく動物の内臓か皮だったか、こすったり打ったりして音をだします。風は千差万別であるから、それが打ったりこすったり吹いたりする楽器のバリエーションとなったのでしょう。管は、打ったりこすったりするのでは

なく吹いて音をだすから、弦や打と比べると優しい音に聞こえます。例えば、フルートは、大空と小鳥のイメージに合います。ただ、進軍ラッパのようなものもありますので、一概には言えません。以前、イタリアのニニロッシ(Nini Rosso 1926~1994)の「夜空のトランペット」というのがありました。星の夜空に澄み切ったトランペットの音が吸い込まれていくような印象を受けました。言葉は必要ないのです。喜びも悲しみも、意味を持つ言葉よりも、感じる音の方がいいのです。おいしいものを食べた時、「んーん、うまい」となりませんか。まず、意味のない無意識が作り出す音が先です。言語は、意識が作り出したものです。そこには、養老先生が言っているイコールの方程式があります。文字でも音でもすべて人によって異なるのですが、個別差異無視して、概念としてイコールで結んでいるのです。このイコール方式が人間文明の基礎になっています。

楽団は自然の音を模すのです。楽団音楽を聴いているときは、言語脳はシャットダウンします。音楽に言葉は要らないのです。いや、邪魔になるかもしれません。意識前に体がもどります。耳だけではありません。体全体で聴くのです。毛穴を通して音が入ってきます(ライブに行く人はこれを求めて行くのでしょうか)。聴く人間の体(自然)は自動的に反応します。音楽では繰り返しが使われます。自然には繰り返しがあふれています。日は、昼から夜へと経巡ります。子供は自然そのもの。その子供は遊びを繰り返してやるのが好きです。音楽に繰り返しが多いのは、自然のこの部分をまねているのです。民衆に分りやすい音楽は繰り返しの音楽です。その代表はバッハ(Bach)だと思います。心地よい繰り返し、これがバッハの真髄だと思います。

筆者は、毎年ウィーンフィルのNew Year Concertをテレビで見るのを楽しみにしています。今筆者が言ったことがよく分かるのは、それをみたときです。あのそれぞれがプロ奏者である奏者の集団が曲を奏でます。曲を聴いている間は、脳は何も考えられません。言葉が作動しないからです。もしかしたら視覚もありません。目を閉じて聴くともっと集中できるかもしれません。曲に合わせてウィーン国立バレエ団のバレエも見せてくれます。華やかな体の動きは、奏でる音楽と見事に合うのです。movement(体の動き)と音が一体になります。英語では、「楽章」'movement'になる所以はここにあるのか、と想ったりします。正に、先ほど述べた「動」の世界です。

皆さん、ウィーンフィルのすばらしさは、奏でる音楽だけではありません。渋谷ゆう子さんの「ウィーンフィルの哲学」(NHK出版新書,2023年)によると、実はウィーンフィルは所属する経営母体を持っていません。所属する都市とか会社とかのバックの組織はないのです。自前ですべてを行っています。指揮者選びからチケットの販売まですべてメンバーが行っているのです。つまり、その組織はピラミッドになっていません。横一線です。音楽作りにはどこからの指示も押しつけも受けないという強い基本姿勢がうかがわれます。また、そのことは1842年の創設以来の伝統だそうです。正にプロ中のプロといえるのではないのでしょうか。現在の楽団長のDaniel Froschauer氏は、「上から指示するのではなく、とにかく楽団員の意見を聞くのが仕事です」と言っています。政治家や会社の幹部に聞かせてやりたい話ではないですか。なんでも団員みんなで決める、一人一人が責任を持つという練度の高い姿勢が貫かれています。上に立つ人間に権力を与え、それによって組織を動かすという昔からどこにでもある方式は、いわば音楽の純粋性に反するというこの現れだと思います。音楽に限らずそうだと思いますが、メンバー一人一人が高いレベ

ルの人間であることがそれを可能にしています。この俗社会もそうならばもっと住みやすくなるでしょう。

以下は余談です。筆者が昔務めた学校に音楽科があって、あるとき学校の音楽ホールでの演奏と音楽指導に、当時ウィンフィルのフルート奏者であった人にきてもらいました。Günter Voglmayr (1968~2012)氏です。通訳件世話役として筆者は一日彼に付きあいました。演奏前のホールでの練習で、音を聞かせてもらいました。素人の筆者にも、フルートの音の質は、体全体で受け止めなければならないような重厚さを持つ音だと思いました。氏と音楽科の教務室でお昼を食べながら話をしました。筆者は本番でうまく通訳できるかどうか少し心配だったので、生徒から出る質問を予想して、氏に前もって答えを尋ねておきました。本番になりました。演奏後、生徒から質問が出ました。予想した質問でした。しかしフォーグルマイヤー氏の答えは、教務室での答えとはまったく違っていました。芸術家とは、筆者のような凡人の俗な計算が及ばないところにいる人なのだと思います。今思い出しても苦笑する経験でした。それからほどなく氏の東京公演があり、それを聴きに行ったある音楽の先生が、氏からの筆者への贈り物としてサイン入りのCDを預かってきてくれました。なんだか、いい仕事をしたような気持ちになりました。氏はまだ若いのにすでに鬼籍に入ってしまった。まことに残念です。しかし、筆者は彼のフルートの音を今でも忘れていません。

movement 「楽章」

日本語の「楽章」は漢字では「楽」と「章」なので、「奏でる」と「区切り（一節）」の意味です。したがって、「演奏の区切り」という意味になり、誰にもわかります。ところが、英語では、すでに述べたように、「楽章」は'movement'になっています。「運動」です。アピールをする運動です。'movement'をCOBUILDで引けば、"a major section of a symphony, concerto, or other piece of classical music"と出ていますが、ポイントは、音楽がmovement「動き」としてとらえられているということです。例えば、四楽章から成るのなら、起承転結を示す音の動き(development)として作品をとらえるわけです。音のつながりを動きとしてとらえるわけです。空気を振動させる動きには音が伴います（人間の耳に聞こえる周波数は限られているが）。あらゆるものの動きや変化に、音やリズムやテンポがあります。どなたか名前を忘れましたが、ある音楽の専門家が、モーツァルトは馬車で数多く旅をした人で、馬車の中で揺れるモーツァルトの体の動きが彼の音楽に出ている、と言っていました。確かに、モーツァルトの音楽を聴けば、スムーズな動きや時にでこぼこ道を走るような音の動きが、見事に音として実現されているようにも感じます。動きと音楽は切り離せません。たとえば、バイオリンの奏者は体を揺らしながら引きます。他の楽器の奏者も同じです。指揮者もそうです。動きには指揮者それぞれ個性があります。みなさん指揮棒のみならず、体を動かします。音と体の動きとが一体になっているわけです。指揮者が必要なわけは、この辺にあります。指揮者を先頭に（自己中心的に）外へ発信するのです。ですので、日本の古い音楽には、西洋のような指揮者は必要なかったのです。

言語も音であるので、人はスピーチをするとき体を動かします。ギリシャ・ローマ以来、スピーチで最も大切なのは、何をいうかではなく、どういうかであるとい

われています。すなわち、人を感動させるには、音の効果（例えば、声の強弱や高低のメリハリ、すなわち音の動き）が言葉の内容より大きいとの研究成果も出ています。言葉で訴えるときの体の動きはすべて無意識に行われます。音（音楽）、言葉が一体となって脳と体に組み込まれていることをしめします。すでに引用したM. Changiziは、同書の中で、“Music is movement.”と言い切っています。そして、‘movement’がいかに音楽と結びついているかを、物理学の「ドップラー効果（Doppler effect）」を例に説明しています。人間の歩行、鳥の鳴き声、接近する物体の音、離れていく物体の音など、あらゆる動きには音が伴われ、その音は高低やメロディーを含んでいるのです。人間は常に音楽に身を浸しているのです。

辻井伸行

ピアニストの辻井伸行さんは目が見えません。しかし、楽譜は耳が（？）すべてを記憶します。楽譜は曲の設計図です。辻井さんは、設計図を見なくてもよいのです。そもそも音は目に見えないのですから、聴覚のみでピアノを弾けても不思議ではないのですが、とにかく彼が演奏している姿を見れば、誰も感動するでしょう。ピアニストの辻井、将棋指しの藤井、囲碁の井山、これらの若者に共通するのは、いずれも求道者であることです。しかも、ただの求道者ではありません。おそらく、起きている時間は、ご飯の時以外はすべてそのことに没頭するのだと思います。筆者のような俗人は適当に遊ばねばなりません。この人たちには、それは必要がないのです。技術を磨くのが遊びなのです。つまり、純度の高い人間なのです。彼らにとっては、賞金や名声などはたいした魅力ではないはずです。求道そのものの魅力に勝るものはないと思っているはずです。だから、得た賞金で高級車を買ったり、豪邸を建てたりはしないはずです。そうするのは俗の俗で、純度の低い人です。金回りのよい俗人には純度が低い人が多いかもしれません。しかし辻井などは、求道そのもので脳にドーパミンが放出されるタイプの人間なのです。彼らの遺伝子がそうさせるのです。

とにかく辻井は素晴らしい演奏をします。辻井が演奏するときには、彼の体は激しく動きます。動きは演奏の必要不可欠な部分になっています。彼の指先の動きは、彼の上半身の体の動きと連動して作られていくのではないのだろうかと思ったりします。テレビで辻井のアイスランドでのコンサートの番組を見ました。辻井は、アイスランドの自然を聞きに（？）あちこち連れて行ってもらっていました。風を聞き、大地にさわり、うれしそうでした。演奏が無事終了し、アイスランドでの体験を自作のピアノの音楽で表現しました。視覚は要らないのです。画像や映像がなくても聴覚や触覚、あるいは体全体で風景を感じることができるのです。演奏した音楽は優しいロマンチックなアイスランドの優しい風を思わせる音楽でした。彼が心で見たはずの自然はそうであったのです。まさに音楽は、体という自然と切り離すことができない感覚であると思いました。

今回は長くなりました。このくらいにします。次回は、いよいよ英語本体に入らなければならないと思っています。では最後に、いつものように英詩（？）でしめします。最近、3人目の孫ができました。生まれたばかりの孫との触れ合いの中で作りました。



Nativity

K.Soma

How happy I am!
I am holding you in my arms,
Enjoying looking at the bloom and the charm of your little life.
Oh, what a clasp of your hand!
It's the promise of manhood!

You must be your mother's treasure and father's pride.
To me, as I enjoy caring for you,
Your life unfolds in a joyful way
That simple nature's truth about life's coming and going;
When better to get to know it than when you in my arms?

それでは次回まで。